

『現代の英雄』の連鎖化の構造

——とりわけマクシム・マクシームィチ
の位置について——

木 村 崇

1

レールモントフ〈Михаил Юрьевич Лермонтов 1814—1841〉の散文長編小説『現代の英雄』〈“Герой нашего времени”〉¹⁾は連鎖小説〈цикл повестей〉という手法＝形態をとっている。主人公や語り手など文学作品の根幹的要素を共通項に持った、あるいは外枠となる小説に入子式に組入れられるいくつかの独立した短編小説〈рассказы〉や中編小説〈повести〉を一個の作品として統一的テーマのもとに連鎖化〈циклизация〉させるこの手法＝形態は、19世紀の30年代のロシア散文文学にとって特徴的な現象と言える。「特徴的」とはこの場合、量的な関係よりもむしろ質的な関係においてのことである。この時期には、文学史の発展段階を画した、

1) “герой”という語の日本語訳の問題、つまり「英雄」とすべきか、「ヒーロー」ないしは「主人公」とすべきか、あるいはまた「寵児」とすべきかは、この作品の主題に対する訳者の視座の違いによって左右される。レールモントフは、作中人物としての作者という体裁で、「ペチョーリンの日記への序文」において、主人公に対する作者の意見が問われた時のことを想定し、「Мой ответ — заглавие этой книги. «Да это злая ирония!» — скажут они, — Не знаю.〈私の答はこの本の題名だ。『そいつはじつに意地悪い皮肉じゃないか!』』と言うだろうが、それは私のあずかり知らぬことである〉」と書いている。論文筆者は、この皮肉は“герой”ではなく“наше время”に向けられたものと理解しており、後者に対して潰えることのない抵抗をこころみ、屈服することを拒絶し続ける主人公の「英雄的側面」を重視して、あえて「英雄」という訳を採用した。

あるいは後の文学に決定的な影響を与えた連鎖小説があった。たとえばプーシキン〈А. С. Пушкин〉の『ベールキン物語』〈“Повести покойного Ивана Петровича Белкина” (執筆1830)〉やゴーゴリ〈Н. В. Гоголь〉の『ディカニカ近郷夜話』〈“Вечера на хуторе близ Диканьки” (執筆1829—1832)〉、そしてわれわれが研究しようとしているこの『現代の英雄』がそれである。プーシキンとゴーゴリには、それぞれ『エヴゲーニィ・オネーギン』〈“Евгений Онегин” (執筆1823—1831)〉と『死せる魂』〈“Мёртвые души” (第1部執筆開始1836—第1部発表1842)〉という不世出の代表的作品があるが、広い意味では(前者は韻文の長編小説〈роман в стихах〉であり、後者は、各章の独立性は強いが、章から章へのプロットの展開が比較的連続的だという意味で) これらも циклизация による作品と言えよう。

連鎖小説は決して19世紀ロシア文学の初期にのみ固有のジャンルではない。周知のようにすでに14世紀のイタリアには『デカメロン』があるし、それよりもはるか以前からアラビアに伝わる『千夜一夜物語』も連鎖小説とすることができる。われわれの関心の的は、連鎖小説の類型学的問題〈типологические вопросы〉の側面よりもむしろ、もっぱらロシアの19世紀の30年代という限定された時期と、この文学現象との個別的で具体的ななかかわりという側面なのである。つまり、これらのすぐれた諸文学作品がどのような歴史的・社会的必然性と、作品の内在的必然性ととの接点において、そのような手段＝形態を選択するに至ったかを具体的に探求することである。

10年きざみくらいの大きな尺度でロシア文学を振り返ってみると、この頃に現われたひとつの特筆すべき特徴が目に入ってくる。19世紀の30年代前後とは、連鎖小説が試みられた時期であるという以前に、まず文学の主流が大きく韻文から散文へ移行した時期なのであった。世人の常識の中にある「ロシア文学」とは、しばしばこの時期以後の19世紀散文文学を指している。このような常識的理解があながち的はずれだと言えないのは、たしかにもっともすぐれていて、世界文学として広く読まれた作品がそういう

ものであった——ネクラソフ〈Н. А. Некрасов〉などを例外として——からである。30年代は実り多い新時代のロシア文学への決定的な転換点であった。エイヘンバウム〈Б. М. Эйхенбаум〉はこう指摘している。「В русской литературе 30-х годов с полной ясностью определилось движение от больших стиховых жанров к прозе—от поэм разных родов к повести и роману. Последние главы «Евгения Онегина» Пушкин писал уже в предвидении этой новой перспективы. И в самом деле его «роман в стихах» оказался началом бурного роста прозы. <30年代のロシア文学では大きな詩のジャンルから散文へ、すなわち色いろの種類の間詩から中編や長編の小説へ移る動きが完全にはっきりとした形をとった。プーシキンは『エヴゲーニイ・オネーギン』のおしまいの諸章を、すでにこのような新しい展望が開けることを見越して書いていた。そしてじっさいに彼の『韻文小説』は散文の急激な振張のはじまりとなったのである>」²⁾

この変動の起因は何か？ 韻文の限界をつき破ろうとする力は何だったのか？ トマシェーフスキィ〈Б. Томашевский〉によれば、30年代になると長詩やエレジーなどの詩文学だけでは、新たにもちあがってきた諸要求に対して満足のいく回答を与えることは不可能になったため、詩人が散文に転向する現象もこの時期にはよく見られたということで、彼は散文、とりわけ長編小説の出現を、西欧における散文の発展に触れつつ、当時のロシアの思想史的な高まりと結びつけて、こう説明している。「Проблема прозы, а в более узком смысле — проблема романа возникла из потребности отражения в литературе мыслей и понятий; именно романы, проза должны были удовлетворять широкие культурные потребности времени и отвечать на идеологические запросы. Отсюда и особый характер прозы этого периода: ведущими становятся произведения широкого идеологического размаха; романы психологические, философские следуют один за другим

2) Б. М. Эйхенбаум, “Герой нашего времени”, «История русского романа в 2-х томах», т. I, гл. VI, Изд. АН СССР, М.—Л., 1962, стр. 277.

в западных литературах. Перед русской литературой возникает задача создания такой же идеологической прозы на национальной основе. 〈散文の問題——もっと狭義には長編小説の問題——は思想や概念を文学に反映させようとする要求から起ってきたものである。長編小説こそは、散文こそは時代の広範な文化的要求を満してくれ、イデオロギー的欲求に答えてくれるはずだった。そのためこの時期の散文には特殊な性格がそなわった。つまりイデオロギー的に大きな規模をもつ作品が主流となってきた、また西欧諸国の文学では心理小説や哲学小説が続々と現われている。ロシア文学の前にも同じようなイデオロギー的散文を自国の基盤のうえに作り上げる課題が生じている〉³⁾

ロシアにおいてイデオロギー的な関心を高める原因になったのは、なによりもまず1812年の対ナポレオン祖国戦争〈Отечественная война〉であった。この戦争は広範な人々に愛国的・民族的自覚の形成をうながした。そのような一般的雰囲気の中で生まれた作品のひとつが『ディカニカ近郷夜話』である。66—67年版ゴーゴリ7巻選集の解題の筆者は「Интерес передовой русской литературы к жизни народа, к историческому прошлому и фольклору усилился под влиянием патриотического подъема в Отечественную войну 1812 года. 〈人民の生活や歴史上の過去や伝説に対する進歩的なロシア文学の関心は、1812年の祖国戦争における愛国心の高揚の影響によって強まった〉⁴⁾とやっている。この影響によって、たんに題材としての民族的なものに注意が向けられたばかりでなく、ロシア語そのものに、いまだ標準語〈литературный язык〉としてしっかり確立していなかった散文のロシア語自体に強い興味が注がれた。韻文の分野には、修辞学的に練り上げられた規範があったが、そのようなものは進歩的文学にとっては魅力のないものだった。すぐれた作品を書くための豊富な可能

3) Б. Томашевский, Проза Лермонтова и западно-европейская литературная традиция. «Литературное наследство», кн. 43-44, М., 1941, стр. 469.

4) примечание Н. Л. Степанова к произведению Н. В. Гоголя («Вечера на хуторе близ Диканьки») в издании: Н. В. Гоголь, Собрание сочинений в семи томах, т. I, Изд. «Художественная литература», М., 1969, стр. 350.

性に満ちた散文は、書き手が自分の力で作り上げなければならなかった。とうぜんそのような散文は、生きた、げんに知識人や広範な国民大衆の間で話されている口語の土壌の上にしか実現しえない。それまでは散文でものを書こうとした時、文体の「お手本」になったものといえ、公文書・官庁用語的文体〈официально-канцелярская стилистика〉や教会修辞学〈церковная риторика〉であったのだから、口語は標準的散文〈литературная проза〉の唯一の源泉だったのである。散文による標準語の確立という、民族文化の一大事業を主体的にすすめたのは当時の知識人である進歩的貴族だった。それにもかかわらず、かれらの成果は疑いもなく全人民的性格を帯びることになった。ロシアにおける最初の革命家たちをその中から輩出させた一群の人びとは、自分たちの階級的利益に資することを目的にこの事業をすすめたのではなかったし、また事実そうはならなかった。出身階層が貴族であったとはいえ、19世紀のはじめのロシアという歴史的・社会的条件のもとでは、かれらはもっとも進歩的な役割をはたしたのであった。標準的散文が、結果的には国民全体の「共同の産物」であり、いわば「共有財産」となったことについてヴィノグラードフ〈В. В. Виноградов〉はこう述べている。「Стили литературной прозы, питаюсь устным творчеством народа, в то же время сами оказывали цивилизующее влияние на бытовую речь читателей, определяли содержание и изобразительные средства разговорного языка интеллигенции. 〈標準的散文の文体は人民の口承文学を糧にしていたが、同時にそれ自身も読者の日常語に教化的影響を与え、知識人たちの口語の内容と表現手段を規定したのであった〉」⁵⁾

もっとも徹底した愛国主義は、のちにデカбриストと呼ばれる人たち〈декабристы〉の思想に結実していった。祖国戦争をたたかった貴族の青年将校たちは、外国遠征を通じて、近代的な西欧社会の実態とか、共和制や立憲君主制の生きた見本を直接目にする機会を得た。この経験は急速

5) В. В. Виноградов, Стилль прозы Лермонтова. «Литературное наследство», кн. 43-44, М., 1941, стр. 518.

に、百科全書派などの近代的な思想を学習するサークルへと発展した。またかれらは様ざまな政治潮流とか政体の研究や議論を深めて行った。農奴制の上に成り立っている祖国の後進性を痛感し、専制的な帝政〈царизм〉の閉塞的現状の否定と理想的な体制の実現を決意したかれらは秘密結社を作った。アレクサンドル1世〈Александр I〉の崩御後に生じた政治的不安定期をとらえ、この将校たちは憲法を要求して武装蜂起した。しかし1825年12月14日のこの反乱は密告のために事前に察知されており、たちまち鎮圧されてしまった。その時以来ロシアの進歩勢力にはいっそう厳しい「冬の時代が」訪ずれたのだが、この悲劇的事件は、ロシアの精神文化のあらゆる分野に、深い爪痕を残した。だからわれわれは、30年代の散文文学もそういうものとして読まねばならないわけである。

これらふたつの大事件が、30年代のロシア文学にどれほど大きな変化をもたらしたかを、エイヘンバウムは次のように書いている。「Русский роман 30-х годов не мог быть и не был простым продолжением старого правоописательного, дидактического или авантюрного романа. События 1812—1814 и 1825—1826 годов внесли в русскую общественную жизнь настолько резкие изменения и поставили перед литературой столько новых задач и вопросов, что она должна была произвести решительный пересмотр своих целей и возможностей (даже своих личных рядов) и перейти к радикальному обновлению тем, метод, форм и традиций. Это была своего рода культурная революция; тем более серьёзными и трудными были стоящие перед ней задачи. <ロシアの30年代の長編小説は、古くさい風俗描写小説や教訓小説や冒険小説の単純な継続にはなりえなかったし、またそうではなかった。1812—1814年と1825—1826年の事件は、ロシアの社会生活にたいへん急激な変化をもたらし、文学の前にたくさんの新たな課題を提起したため、文学はおのが目的と可能性を（その書き手の隊列すらをも）思いきって再検討する必要にせまられ、テーマや方法、形式や伝統を抜本的に革新する方向に向わねばならなかった。これは一種の文化革命であり、それだけになおさら文学の前にある課題

は重大であり困難であった」⁶⁾

散文文学の台頭を促した諸条件として、もうひとつ無視してならないのは、外国文学からの直接的な刺激である。いうまでもなく19世紀はじめ頃のロシアの貴族にとって、フランス語を駆使するのはあたりまえのことであったし、知識人ともなれば、さらに英語やドイツ語など、ヨーロッパ諸国の言語をよくこなした。そのうえこの頃になると西欧諸国の文学、とくにフランス文学は翻訳によってもさかんに読まれた。フランス文学は19世紀の初頭にはすでにヨーロッパ文学の主流を占めていたが、その中心にいたのはバルザックをはじめとする散文の作家たちであった。ロシア語の散文では文学など書けないと思っていた連中はいざ知らず、散文への興味をふくらませつつあった先進的な文学者たちにとって、これほど強烈な刺激はなかったであろう。どのような比較文学的作用が働いていたかを明らかにするのは、われわれの小論文の目的ではないので詳細に言及するのは避けるが、たとえばレールモトフをとってみても、彼の散文にゲーテやコンスタンなど当時の西欧作家たちの影響があることについては、すでに多くの研究者たちが分析していることである。⁷⁾ ここでわれわれが理解しておかなければならないことは、レールモトフやその他のすぐれた詩人たちが外的な刺激に対し、どのような内的原因によって敏感な反応を示したのかを解きあかさなければ、実は何も明白にならなかったに等しいのだということだ。

2

社会的・歴史的諸条件に比べると、作家自身の芸術的衝動の側面から散文による小説への志向を解剖することはひじょうに困難な作業である。し

6) Б. М. Эйхенбаум, "Герой нашего времени", «История русского романа в 2-х томах», т. I, гл. VI, Изд. АН СССР, М.—Л., 1962, стр. 288.

7) См., например, подробный литературно-сравнительный анализ поэтических и прозаических произведений Лермонтова в статье А. Федорова "Творчество Лермонтова и западные литературы" («Литературное наследство» кн. 43-44, стр. 129-226); см. также упомянутые выше статьи Эйхенбаума (в частности стр. 280-282) и Томашевского.

かしこういうアプローチがなければおそらく、どうしてまさしく連鎖小説というものに（散文小説一般ではなく）なったのかは究明できないであろう。なぜなら、散文自体は小説の形式とか手法ではなく、そのものとしてはやはり手段にすぎないわけで、その手段としての散文をもってどのような小説を構成するかこそが、作家自身の内から湧き出る芸術的衝動によって決定されるものであるからだ。

『現代の英雄』の場合、作者の創作意図を直接にせよ間接にせよ伝える資料は皆無に近い。『現代の英雄』の最初の部分（それがどれであったかは後に触れるとおりに議論を呼ぶところであるが）が書き始められたのは、遅くとも1938年のはずである。この年の6月、レーモントフが自分のもっとも親しい友人ラエーフスキィ〈С. А. Раевский〉に宛てた手紙の中に、わずか数行、このころの彼の創作活動を伝える文面があるので、そのところを抜粋し吟味してみよう。

「... Я здесь по-прежнему скучаю; как быть? покойная жизнь для меня хуже. Я говорю покойная (курсив автора — Т. К.), потому что ученье и маневры производят только усталость. Писать не пишу, печатать хлопотно, да и пробовал, но неудачно.

Роман, который мы с тобой начали, затянулся и вряд ли кончится, ибо обстоятельства, которые составляли его основу, переменились, а я, знаешь, не могу в этом случае отступить от истины. 〈…ぼくは当地でもあいかわらず倦怠感にひたっている。どうしたら良いだろう。ぼくには平穏な生活などなお悪いのだ。“平穏な”（原文イタリック—木村）と言うのは、教練や演習のあとには疲労しか残らぬからだ。書く方は全然だめで、出版も厄介だ。試してはみたのだが失敗だった。

君といっしょに始めた小説はのびのびになっており、どうやら完結しそうにない。それはこの小説の基礎をなす諸状況が変わってしまったためで、君も知っているように、そういう場合ぼくは真実というものに背けないからだ〉⁸⁾

8) М. Ю. Лермонтов, Собрание сочинений в 4-х томах, т. IV, Изд. “Художественная литература”, М., 1965, стр. 417. Все последующие ссылки на это издание даются в тексте так: (том, страница). 〈以下同書からの引用はテキスト中に（巻，ページ）のごとく示す〉

レールモントフは1837年『詩人の死』〈“Смерть поэта”〉を書いたかどでカフカーズの駐屯部隊へ追放されたが、この手紙の時点にはツァールスコエ・セロー〈Царское село〉の近衛驃騎部隊〈лейб-гвардейский Гусарский полк〉に戻っていた。しかし出版活動まで許されていたわけではなく、この手紙にあるように、『商人カラージニコフの歌』〈“Песня про царя Ивана Васильевича, молодого опричника и удалого купца Калашникова”〉の発表はうまく行かなかった。⁹⁾ ラエーフスキィといっしょに始めた長編小説とは『公爵夫人リゴーフスカヤ』〈“Княгиня Лиговская”〉である。この作品をめぐる二人の関係が実際はどんなものであったのか、ラエーフスキィの参加の度合はどれくらいだったのかは、あまりはっきりしていない。このことについてブローツキィ〈Н. Бродский〉は次のような見解を表明している。「Обычное представление о Раевском, что у него были значительные литературные связи, но что сам он ничего не писал, не должно было бы иметь места хотя бы по той простой причине, что в одном из писем к Раевскому Лермонтов писал: «роман, который мы с тобой начали», тем самым давая понять, что в сохранившихся главах романа «Княгиня Лиговская» какая-то часть принадлежит его другу. Комментаторы этого признания Лермонтова справедливо предполагали, что «возможно, именно по инициативе Раевского и при его помощи писались те страницы романа, где говорится о чиновнике Красинском; Лермонтов вряд ли знал быт и нравы чиновников...»
 〈ふつうラエーフスキィについては、彼にはたくさんの文学的な交流関係があったけれど、自分自身では何も書かなかったと見られているが、こういう理解は、ラエーフスキィにあてた手紙のうちの一通にレールモントフが『君といっしょに始めた小説』と書き、そのことによって長編小説『公爵夫人リゴーフスカヤ』のそのままになっている諸章のうちいくつかの部分は友人であるラエーフスキィのものであることを

9) Там же, стр. 496, примечание И. Л. Андроникова к письму Лермонтова С. А. Раевскому. この件について Эйхенбаумは《Тамбовская казначейша》であるとの別見解をとっている。

暗示しているという、簡単な理由からだけでも当たらないはずである。レールモントフのこの告白を評した解説者たち（“Academia”版第5巻の——木村）は正当にも『おそらくは、ラエーフスキィのイニシャチヴによって、また彼の援助を得て小説中の役人クラシンスキィのことが語られるページが書かれたはずだ。レールモントフが役人の風俗習慣に通じていたとは疑わしいからである』と推測している¹⁰⁾。こういう見解が正当かどうかの考察は、レールモントフの散文の創作活動の全段階を俯瞰しうるような別の機会に譲ることにしよう。『現代の英雄』を研究しているわれわれが見逃してならないのは、ラエーフスキィと「いっしょに始めた小説」が中断してしまったという事実であり、レールモントフ自身が述べている理由（引用した手紙の後半分）に含まれるある決意である。それは『現代の英雄』の創作の動機を追求するうえで何らかの暗示を与えてくれるはずだからだ。

「Обстоятельства, которые составляли его основу, переменились」とはいったい何のことを言っているのであろう。『公爵夫人リゴフスカヤ』は1836年から書き始められた自伝的小説である。当時ラエーフスキィとレールモントフはペテルブルグ〈Петербург〉で同居していた。ところが、1837年のはじめに、プーシキンの死を悼んで書いた詩『詩人の死』を流布したかどでレールモントフはラエーフスキィとともに逮捕され、流刑になった。だから「小説の基礎をなす諸状況が変わってしまった」というのは、この事件を境にして変わった詩人自身の運命をおいてほかには考えられない。この経験は、そしてカフカーズ〈Кавказ〉の印象はレールモントフに多くのことを教えたことであろう。主題展開〈сюжет〉が自伝的要素を材料として組立てられていたため、今や自伝そのものが激変してしまったことによって、小説はただ書き継がれるだけでは済まなくなった。「а я, знаешь, не могу в этом случае отступить от истины」という言葉は、文学作品の中に真実〈истина〉を映し出そうとしたレールモントフの新しい方法〈метод〉が確立しつつあったことを感じさせる。

10) Н. Бродский, Святослав Раевский, друг Лермотова, «Литературное наследство», кн. 45-46, М., 1948, стр. 307.

ただこの方法で「自画像」を描こうとすれば、真実と芸術の間にある弁証法的矛盾は絶対的背馳に変らざるをえなかったであろう。レールモントフはその時から『公爵夫人リゴーフスカヤ』の完結を断念し、「自画像」的レベルの“真実”ではなく、典型〈типичность〉という“真実”を散文小説の中で結晶させる方向に踏み出したのであった。彼のこの芸術的成長は、一方その当時のロシアの一般的文化環境の中では早熟すぎたために壁にぶつからざるをえなかった。プーシキンが『オネーギン』の第1章の56で慨嘆している、読者や評論家たちのあの低劣卑俗な状態は依然として支配的であった。

Цветы, любовь, деревня, праздность,

Поля! я предан вам душой.

Всегда я рад заметить разность

Между Онегиным и мной,

Чтобы насмешливый читатель

Или какой-нибудь издатель

Замысловатой клеветы,

Считая здесь мои черты,

Не повторял потом безбожно,

Что намарал я свой портрет,

Как Байрон, гордости поэт, —

Как будто нам уж невозможно

Писать поэмы о другом,

Как только о себе самом.

花よ、恋よ、田舎よ、閑散さよ、

野原よ！ 君らがぼくは好きでならない。

オネーギンとぼくのこの違いよ、

それに気づくのはいつも楽しい。

それというのも皮肉な読者とか、

手のこんだいいがかりをつけるのが

得意などこかの先生殿に、
 ぼくの姿かたちをこのロマンの中に
 探られ、あとでこんなべらぼうめから
 自画像を塗りたくったなどと言われたり、
 バイロンもどきの高慢な詩人にされたり
 するのじゃとてもたまらないから。
 詩人は自分のことしか叙事詩の中に
 書けないというわけでもあるまいに。¹¹⁾

プーシキンのはやくからロマンチズム〈романтизм〉を脱し（19世紀の10年代からおよそ20年間ロシア文学ではロマンチズムが隆盛をきわめた）、リアリズム〈реализм〉の方法を開拓して、19世紀ロシア文学の主流となった批判的リアリズム〈критический реализм〉の基礎を築いたといわれる。オネーギンという、いわゆる「余計者の形象」〈образ лишнего человека〉の描写にこのことははっきりと現われているのである。8年以上にわたって書かれたこの韻文小説は、章ごとまたは断章というかたちで少しづつ発表されたが、上に引用した節〈строфа〉の含まれる第一章は1825年にペテルブルグで出版されている。したがってレールモントフが『現代の英雄』を出した時はそれから15年もたっているのだが、文学の受け手側の水準はあまり変わってはいなかった。レールモントフの新しい散文の価値を認めることのできた人たちはごく少数であったと言っても過言ではない。そのため、後に単行本で出たこの小説の第2版にレールモントフは、ある意味では異例な「まえがき」を付さねばならなかった。彼はまず、ロシアの読書層（もちろん反動的評論家たちのことを念頭において）の低次元さを批難する。「Наша публика так еще молода и простодушна, что не понимает басни, если в конце ее не находит нравоучения. Она не угадывает шутки, не чувствует иронии; она просто дурно воспитана. 〈わが国の読書層はまだ未熟で無邪気なものだから、寓話を読んでも、

11) А. С. Пушкин, Полное собрание сочинений в шести томах, т. 3, Изд. "Художественная литература", М. 1950, стр. 29.

おしまいのところでは教訓に出くわさないと、その寓意がわからないほどである。この読書層には洒落も通じないし、皮肉も感じてくれない。ようするに教養の程度がおそまつなのである」(Ⅳ. 7)

このような人たちには、ペチョーリンを形象として理解し、それが持つ意味を作品全体の中で位置づけて考えることができなかつた。彼らはペチョーリンの行為や言葉がそのままレーモントフの道徳や思想の肯定的反映だと思いこんだ。そしてその不道徳性、無宗教性、エゴイズム等々をなじるのであつた。プーシキンのオネーギンの場合がそうであつたように、ここでもペチョーリンなる人物は自画像、もしくは彼の友人たちをモデルにして描いた肖像であるなどと、まことしやかにささやかれた。こういう反応の裏にはしかし、ペチョーリン的人物を、体制とは相入れない何かしら危険な存在として本能的に嗅ぎ取る鋭敏さがひそんでいる。だから『現代の英雄』の発表後に現われ反動的保守的評論に共通するペチョーリン批判は、この作品が形象ペチョーリンというプリズムを通じて、客観的な矛盾が存在する現代を現実的に描いていることに対して、禁じえなかつた不快感を裏返したものであつたと言えよう。問題はなぜ裏返しになつたかである。あらわな言葉であれ、暗示的比喩的な言葉であれ、支配者や制度を批判する言葉で書かれた箇所は、この小説のどこを探しても見つからない。しかし全体としてこの作品は、体制側の人間の読後感に、気持を逆なでするような不快を残す何かを持っている。当時のロシア皇帝ニコライⅠ世〈Николай I〉が、皇后にあてた1840年6月12日付の手紙の中で、『現代の英雄』を通読して、とくにその第2部に嫌悪感をおぼえたと言っているのも、無理からぬことであろう。¹²⁾ レールモントフは「まえがき」で、そのような反応に対して皮肉に満ちた反論を加えている。そして興味深いことには、作品を書くにあたって彼が依拠した方法を披瀝して「まえがき」をしめくくっているのである。「Герой Нашего Времени, милостивые

12) См.: Э. Э. Найдич, "Герой нашего времени" в русской критике, в кн.: «М. Ю. Лермонтов ГЕРОЙ НАШЕГО ВРЕМЕНИ», Изд. АН СССР, М., 1962. стр. 166.

государь мой, точно портрет, но не одного человека: это портрет, составленный из пороков всего нашего поколения, в полном их развитии... (пропущено мной — Т. К.)... Довольно людей кормили сладостями; У них от этого испортился желудок: нужны горькие лекарства, едкие истины... (пропущено мной — Т. К.)... Будет и того, что болезнь указана, а как ее излечить — это уж бог знает! <わが読者諸賢よ, “現代の英雄” はたしかに肖像ではある。がしかしひとりの人間のものではなく, われらの世代全体にあるもろもろの欠陥からなる肖像だ。それらの欠陥をいっばいに広げてみせた肖像なのである……(中略——木村)……人びとは甘いものをたっぷり食べさせてもらって, そのため胃をこわしている。だからにがい薬, 刺激のきつい真実が必要なのだ……(中略——木村)……病気が指摘されただけで十分だ。それをどうやって治すか——そんなことは皆目分らぬ>」(Ⅳ, 7—8)。

レールモントフは, いたずらに弾圧の口実を与えぬよう, 慎重に言葉を選んで書いているが, 「современная образованность изобрела орудие более острое, почти невидимое и тем не менее смертельное... <現代の高い教養はいっそう鋭利な, ほとんど目には見えないけれど致命傷を負わせる凶器を発明した……>」(Ⅳ, 7) というような言葉の背後には, 現代社会批判の巧妙な, そして強力な手段を自分はいち早く見出したという自負心がうごめいている。一見彼が指摘したのはあるひとりの若者の不幸な病気のように見えるが, はたしてそうであろうか? そうではない。ここに描かれている「肖像」が「портрет, составленный из пороков всего нашего поколения」であると断っていることで明らかのように, 現代の若い世代全体がひどく蝕まれていることの芸術的表象として主人公の重い「病状」がつぶさに描き出されているのであり, そしてもっと重要なことは, その病根が現代の社会の時代閉塞的状况に根ざすものであることが同時に指摘されているのである。それがいかに手のこんだ方法でなされているかは後ほど分析しよう。

さてレールモントフは, この病気の治療方法は知らないといっているが,

それは本音だろうか？ ロシアの思想史的発展を顧りみるなら、どうやら本音と見るのが妥当のようである。もちろん正確な答はけっきょく『現代の英雄』全体の正確な分析から出されなければならない。ただここでレー尔蒙トフが少なくとも以上のような「心がまえ」をもって作品を書こうとしたのだと述べている文学史上の事実の中に、連鎖小説というかたちに結実せざるをえなかった必然性を追求することは、少なくとも無益ではないと思われる。

ラエーフスキィへの手紙の時点にすでに萌芽としてあり、単行本『現代の英雄』が出た時には確立していたレー尔蒙トフの散文における最大的方法的新基軸は、**自伝的要素を基礎にした個別的真實の芸術的再現をもってではなく、時代の本質を肉化した典型**（これはけっして同世代人全体の平均値とか最大公約数と理解すべきではない）、**いいかえると核心的真實の芸術的再現をもって主人公を実現した点**である。そしてその実現にはどうしても、主人公の存在を読者に客觀的事実であると思わせ（個別的真實の反映ではないゆえに、ますますそれは要求された）、作者の虚構〈вымысел〉の産物という印象をぬぐい取るべきさまざまな手法をこらす必要があった。『現代の英雄』の場合、それは「語り手」〈рассказчик〉や「地の文の主」〈повествователь〉の色いろの種類の独立化〈обособление〉と多元化となった。しかし皮肉なことに、ペチョーリンという形象の芸術的魅力があまりにも強烈すぎたため、そのような手法の意図は当時の読者には通じず、彼らの注意は主人公の言動の「不道德性」に釘付けされ、それゆえにかえって、主人公は非現實的だという見解が現われた。『現代の英雄』に関する批評の研究をしたナイディチ〈Э.Э. Найдич〉は、反動陣営からなされた反応の第一声として1840年に雑誌『灯台』〈“Маяк”〉に掲載されたブラチャック〈С. О. Бурачок〉の論文を紹介している。「Отождествив автора романа с Печориным, Бурачок с негодованием писал, что в «Герое нашего времени» нет ни религиозности, ни народности», что образ Печорина является клеветой на русскую действительность, «на целое поколение людей», что «в натуре этикие

бесчувственные люди невозможны》：《В ком силы духовные хоть мало-мальски живи, — заключил критик, — для тех эта книга отвратительно несносна》〈小説の作者とペチョーリンを同一視した上で、ブラチョックは、“現代の英雄”には『信仰心も国民性もない』とか、ペチョーリンの形象はロシアの現実に対する、また『ひと世代の喜びと全体に対する』中傷であるとか、『実物としては、このような冷酷無情で良心のない人間というものはあり得ない』と、憤慨して書いている。そしてこの批評家は『たとえほんの少しでも内に精神的力の息づいている人間にとってこの書は、嫌悪の情をもようしうんざりする代物である』と結論している〉¹³⁾ だからこそレールモントフは次のように反論しなければならなかった。「... я вам скажу, что ежели вы верили возможности существования всех трагических и романтических злодеев, отчего же вы не веруете в действительность Печорина? (пропущено мной — Т.К.) Уж не оттого ли, что в нем больше правды, нежели бы вы того желали? ... 〈…わたしは諸君らに言おう。君たちは、あらゆる悲劇的悪人およびロマンチックな悪人たちの存在する可能性を信じてきたのであれば、なにゆえペチョーリンの現実性を信じないのか、と……(中略——木村)……とりもなおさず、この人物の中に、諸君が期待した以上にたくさん真実があるからではないのか?〉」(Ⅳ, 8)。

新基軸のもうひとつの要素は、「病氣」の原因も、その処方箋も示さないリアリズム、いわば記述的〈описательный〉リアリズムに徹底していることである。この方法をとった理由は、少なくとも当時の反動的な一般情勢と、レールモントフ自身が要注意の人物として監視されていた状況を考え合わせれば、おのずから明らかである。しかし、作者にとって「病因」だけははっきりしていた。また注意深い読者は、この小説の中に「病因」の指摘があることを見ぬくことができた。あのブラチョックでさえ「клевета на русскую действительность」と言っているではないか。しかし彼がいかに残念がろうとも、状況証拠だけで作者を糾弾することは不可能である。それにしても物的証拠はどのように隠蔽されたのだろうか？結論を先

13) Там же.

に言えば、これもやはり「語り手」や「地の文の主」の独立化と多元化のおかげなのである。そしてこういったことは、「連鎖化」とはほとんど類義語的關係にあると理解してさしつかえない現象である。

3

散文の連鎖小説としての『現代の英雄』の構成を規定した諸条件は、上記の要因だけで汲み尽されるものではない。これらの要因は、創作の動機のレベルで作用した有力な要因ではあろうが、レールモントフが最終的に今日われわれが目にするかたちにこの小説をまとめ上げるまでのかなりの時間の中で、どのような取捨選択、加筆または削除による修正を行った結果こうなったか、つまり創作過程のレベルで決定的に連鎖化を実現させた要因は何だったかをさらに調べる必要がある。残念ながらわれわれにはレールモントフの原稿や雑誌に掲載されたヴァリエーションなど、第1次資料を直接検討する用意がないため、それらにあたった研究者の報告を基に考察せざるをえない。¹⁴⁾

ひろく知られているように、『現代の英雄』は最初から単行本として発表されたのではなく、のちに連鎖をなす5つの短編・中編小説のうちの3編が、雑誌『祖国雑報』〈“Отечественные записки”〉に少しずつ間隔をおいて掲載された。すなわち1839年のNo. 3にまず『ベーラ』〈“Бэла”〉が、ついで同年のNo. 11に『運命論者』〈“Фаталист”〉が、そして翌年のNo. 2に『タマーニ』〈“Тамань”〉が発表されたのであった。また『運命論者』がのった号には、レールモントフが近じか既発表と未発表の小説を集めたものを出版するという予告がなされている。もし単行本の『現代の英雄』が、これら3編の小説をそのままこの順序でまとめたものにすぎなかったなら、その場合は同一の主人公であるという要素だけを鎖の環のつなぎにし

14) Ср. упомянутую выше статью Эйхенбаума, а также примечания к тексту романа “Герой нашего времени” в том же собрании сочинений и в кн.: «М. Ю. Лермонтов ГЕРОЙ НАШЕГО ВРЕМЕНИ», Изд. АН СССР, М., 1962.

た、ありふれた連鎖小説となっていたらう。

大きな違いは、ここれらにさらに『マクシム・マクシームィチ』〈“Максим Максимыч”〉、『公爵令嬢メリー』〈“Княжна Мери”〉という二編の小説が加わり、またその配列が、時間系列には従がわず、『ベーラ』、『マクシム・マクシームィチ』、『タマーニ』、『公爵令嬢メリー』、『運命論者』の順になったこと、その他『マクシム・マクシームィチ』と『タマーニ』の間に「ペチョーリンの日記への序文」〈“Предисловие к журналу Печорина”〉が入り、『タマーニ』までを第1部〈Часть первая〉、『公爵令嬢メリー』以下を第2部〈Часть вторая〉としたこと、第2版からはさらに先に引用した「まえがき」が付せられたことである。これらはたしかに大きな変化であった。そしてこの全体的な変化は、いくつかの複雑な段階を経て行なわれたものであることを語るさまざまな痕跡が残っている。たとえば、日記であるはずの『タマーニ』や『運命論者』に日付がなかったり、第2部が「日記」の途中から始まり、しかもカッコ内の副題が「(ペチョーリンの日記の終編)〈Окончание журнала Печорина〉」となっているにもかかわらず、『公爵令嬢メリー』のあとにさらに『運命論者』が続いたり——もっともこれらは完全な矛盾というわけではないが——なにかしら作品全体のなりたちの、容易ならぬ屈折ぶりを感じさせる。

『現代の英雄』のテキストの原稿や雑誌や単行本におけるそれぞれのヴァリエーションにまでわたって細かく比較検討したエイヘンバウムの意見を整理すると、この長編小説の成立過程についての彼の結論は以下のようになる。

イ) 『祖国雑報』での発表順序や単行本での位置とは異なって、『タマーニ』は『ベーラ』よりも先に、そしておそらくは他の4編の小説よりも先に書かれていた。

ロ) その時点では『タマーニ』の主人公である「私」はペチョーリンではなく、文学にたずさわっている人間、おそらくは作者レールモントフを想定した人物形象であった。

ハ) 「長い連鎖小説〈длинная цепь повестей〉」の構想ができて

から、『タマーニ』の主人公はペチョーリンとして扱われ、別にレールモントフ自身を作中人物として『ベーラ』と『マクシム・マクシームィチ』および「日記の序文」に登場させた。

ニ) いわゆる「長い話 <длинный рассказ>」の最初の構成部分には『タマーニ』と『運命論者』は入っていなかったと考えられる。

ホ) 主人公の生活および個性を少しずつ紹介し、読者の認識をだいに広げ深めるといふ叙述のうえでの論理に基づいた心理的連鎖化が行なわれ、諸事件の時間的前後関係は崩された。

この仮説的要素を含む見解は、はたして正しいであろうか？ エイヘンバウムの提出した根拠と推論とは全体的には説得力をもってわれわれに訴えかけるが、ニ) のような理解の根拠には賛成するわけにはいかない。ニ) への反論の中にじつは、われわれの論文の要となる命題が含まれているのである。しかし全面的にその命題を開陳する前に、エイヘンバウムの証明を再検討しておく必要がある。

エイヘンバウムが行なった上記のような大胆な洞察の糸口は、原稿の段階から最終的に単行本になるまでに幾たびか書き換えられていったテキストにおいて現われたり消えたりした“записывающие люди <ものを書き留める人間>”という言葉に注目した結果得られたのであった。今日目にする『現代の英雄』では、“записывающие люди”という表現が最初に出てくる場面は『ベーラ』のごく始めの方にあり、マクシム・マクシームィチからペチョーリンのことを聞き出す「私」、すなわちレールモントフ自身と見られる——「そう見せている」と言った方が適當か？——人物が、自分の気持を内面暴露して、「Мне страх хотелось вынуть из него какую-нибудь историйку —— желание, свойственное всем путешествующим и записывающим людям. <この御人から何か話をしこんでやりたい気持が無性にしてきた。旅をしてもものを書き留めて歩いている人間ならだれしもが本来的に有するあの欲望だ>」(Ⅳ, 12) と述べる箇所である。『ベーラ』は発表順からいうと一番早く、1839年であったが、それからおよそ一年して同じく『祖国雑報』No. 2 に載った『タマーニ』にも、ほぼ同じ表現が使

われているそうである。「А право я ни в чем не виноват: любопытство — вещь, свосйтвенная всем путешествующим и записывающим людям. <ところでまったくのところ, わたしには少しも罪はない。好奇心というものは, 旅をしてものを書き留めて歩いている人間ならだれしもが本来的に有するものなのだから>」¹⁵⁾ がそれである。問題はこの「私」がペチョーリンだという点にある。雑誌の編集局が, この作品はペチョーリンの日記からとったものであることを断っているくらいだから, たしかである。これでは記憶のよい読者はかえって混乱したに違いない。この語句は単行本での「Как камень, брошенный в гладкий источник, я встревожил их спокойствие и, как камень, едва сам не пошел ко дну! <なめらかな水面の泉に投げ込まれた石のように, わたしはかれらの安寧をかき乱し, そしてまた石のように, 自分自身底深くのみ込まれかけたとは!>」(IV, 57) の後に書かれていた。したがってこの語句は主人公の好奇心による行為の正当化をはかるためのものである。『ペーラ』では“записывающие люди”という言葉が, 作品構成上の重要な人物である詩人の「私」の, 職業や旅行ぶりを伝え, 形象に肉付けをする重要な表現であるのに比して, 雑誌版『タマーニ』の場合は, 「副次的な動機付け的役割 <второстепенная мотивировочная роль>」しかはたしていないというエイヘンバウムの見方はおそらく正しい。

これだけではまだ偶然性の域を出ない重複, ようするにたんなる錯誤とみなすことも可能である。ところが『タマーニ』の原稿における最終的テキストには, いちばん最後の部分に次のような一節が書かれていることが報告されている。「Что случилось с бедной старухой, со всевидящим слепым, — не знаю, и не желаю знать. Сбыли они с рук свою контрабанду или их посадили в острог? Какое дело мне до бедствий и радостей человеческих, мне, странствующему офицеру

15) См.: Б. М. Эйхенбаум, “Герой нашего времени”, «История русского романа в 2-х томах», т. I, гл. VI, Изд. АН СССР, М.—Л., 1962, стр. 294.

и еще с подорожной по казенной надобности? <あわれな老婆と何でも見えるめくらがどうなったかは知らない。また知ろうとも思わない。彼らは密輸と手が切れてせいせいしているか、それとも牢獄にでもぶちこまれたか? 旅する士官の身で、しかも官用駅馬券を所持しての旅では、人の不幸や喜びなどにいちいちかかずらあっておれようか? >」¹⁶⁾ この一節の半ページほど前には、今見たとおり、原稿にも雑誌のテキストにも主人公の「職業的」好奇心のことが書かれており、これでは明らかに自家撞着である。だから実際に雑誌に掲載されたテキストではこの部分が「Что случилось с бедной старухой и с мнимым слепым——не знаю. <あわれな老婆とにせめくらがどうなったかは知らない>」と削除訂正された。¹⁷⁾

さてわれわれが読む『タマーニ』のテキスト（連鎖小説『現代の英雄』のひとつの環としての）は、原稿とも、『祖国雑報』に発表されたものとも異なっている。まずその第一は、主人公の好奇心からの行為を正当化した「А право я ни в чем не виноват: любопытство——вещь, свойственная всем путешествующим и записывающим людям」という問題の表現は、すっかり取り払われたことである。これは『ペーラ』の中の、詩人と思われる人物の「私」に関する表現との重複を避けたためであろうということは容易に想像できる。さて変化の第二は、『タマーニ』の最後の部分で、原稿を削除訂正して雑誌に発表したものを再度手直しして、基本的には元のかたちに戻したことである。その結果「Что случилось с старухой и с бедным слепым——не знаю. Да и какое дело мне до радостей и бедствий человеческих, мне, странствующему офицеру, да еще с подорожной по казенной надобности. <老婆とあわれなめくらがどうなったかは知らない。旅する士官の身で、しかも官用駅馬券を所持しての旅では、人の喜びや不幸などにいちいちかかずらあっておれようか? >」(Ⅳ, 58) となった。

『ペーラ』が1839年の『祖国雑報』 No. 3 に載った時、これには“Из

16) См.: Там же, стр. 295.

17) См.: Там же.

записок офицера о Кавказе <ある士官のコーカサス旅日記より>” という副題がついており、しかも続きものになることを示唆するようにその最後を「Мы не надеялись никогда более встретиться, однако встретились, и, если хотите, я когда-нибудь расскажу: это целая история. <また会うことがあろうなどとは、おたがいまったく期待していなかったのだが、しかし再会した。お望みならばいつかそれをお話しよう。なかなか大した物語なのである>」と結んでいるということだから¹⁸⁾ —— したがって長編小説にまとまってそれが実現したために、単行本では“когда-нибудь <いつか>”は落ちている ——、この時にはすでに、カフカーズについての旅日記（ペチョーリンの日記<журнал>ではなく、『ペーラ』に「私」として出てくる詩人の日記）をもとにした連鎖小説の構想はできあがっていたと考えるのが妥当であろう。さらに1839年の同誌 No. 11 に載った『運命論者』には、あたかも作中人物の詩人である「私」が発表のいきさつを語るかのように、「Предлагаемый здесь рассказ находится в записках Печорина, переданных мне Максимом Максимычем. <ここに紹介する話は、マクシム・マクシムィチから手渡されたペチョーリンの日記の中にあるものである>」¹⁹⁾ というまえがきが付されているし、『タマーニ』にも、「Еще отрывок из записок Печорина..... <ペチョーリンの日記からのいまひとつの断片.....>」²⁰⁾ であるという注釈がなされているからには、連鎖小説中に組込まれるペチョーリンの日記という連鎖の構造についても、その日記がマクシム・マクシムィチから受取ったものであるという筋立てについても、おおよその構想はすでにこのころにはできあがっていたはずである。ならば『タマーニ』のテキストにみられる紆余曲折はいったいどういう理由からか？この疑問に答えたのが、エイヘンバウムの見解のイ), ロ), ハ) までである。

たしかに、上に指摘されたような困乱は、全体的構想がすでに大まかにであれ形成されている中での現象ではありえない。したがってもっとも自

18) См.: Там же, стр. 293.

19) См.: Там же, стр. 294.

20) См.: Там же.

然な仮説は二通り考えることができる。ひとつは、作者自身を主人公にしたた（もちろん自伝小説ではなく、フィクションの）短編小説『タマーニ』があらかじめ書き上がっていたところへ、その後べつにペチョーリンを主人公とした「長い物語」の連鎖小説の構想が煮つまって行き、やがて何かの理由で『タマーニ』も一部手直しの上（主人公をペチョーリンとして扱うことに関連した）、そういう連鎖の全体系に付け加えられたと見る考えである。もうひとつは、一度書き上げた『タマーニ』の中にはレールモントフがそのままでの発表をためらった何かの弱点やはばかりがあったが、作者にとって貴重なこの作品を核に、あるいはそれを最大直接の契機として、現代そのものを描きうる、もっと大規模な小説を構想した結果連鎖小説になったという考えである。もちろんこの場合も、『タマーニ』は主人公の変更にとまらぬ修正をほどこされたはずである。エイヘンバウムは、どちらかというも前者の考え方をとっている。「Надо, следовательно, думать, что «Тамань» написана до «Бэлы»; мы бы даже решились утверждать, что «Тамань» была написана вне всякого цикла и до мысли о нем, т. е. что по своему происхождению этот рассказ не имеет никакого отношения к Печорину, если бы не одно обстоятельство, несколько мешающее такому выводу. <したがって、『タマーニ』は『ベーラ』よりも前に書かれていたと考えるべきだ。われわれは、『タマーニ』が連鎖の外で、また連鎖を思いつく以前に書かれたと、すなわちこの短編小説はその系統からいってペチョーリンとは何の関係もなかったと、もしもこのような結論をいくらか妨げるひとの事情がなかったなら、おもいきって断言していたところであった>」²¹⁾ おもいきった断言をいささかためらわせた“одно обстоятельство”とはいったい何かは述べられてはいないが、エイヘンバウムが前者の考えに近いことは疑いない。仮説として後者の可能性を考慮した理解からは、結論の 二) は出てこないはずだからである。

エイヘンバウムは、『タマーニ』が『現代の英雄』を構成するどの小説よりも前に書かれたであろうことは十中八九まちがいないと語ったあとで、

21) Там же, стр. 295.

次のような見解を述べている。「Есть вообще некоторые основания думать, что первоначальный состав «длинного рассказа» ограничивался тремя вещами: «Бэла», «Максим Максимыч» и «Княжна Мери»; остальные две, «Тамань» и «Фаталист», во-первых, не подходят под понятие «журнала» (т. е. дневника) и, во-вторых, по духу своему не совсем согласуются с личностью Печорина, как она обрисовывается из «журнала», а иной раз и с его стилем, кругом представлений, знаний и т. д. <一般的に見て次のような考え、つまりそもそも「長い話」を構成していたのは『ベーラ』と『マクシム・マクシムイッチ』と『公爵令嬢メリー』の三編だけであって、のこりの二編の『タマーニ』と『運命論者』は、ひとつにはジャーナル(すなわち日記)という概念には当てはまらないし、さらにまた作風の点でも、これらは「日記」から彷彿として浮びあがるベチャーリンの個性とはかならずしも一致しないし、時にはベチャーリンの文体にも、ものの考え方や知識にもそぐわないとする考えには、ある程度の根拠がある>」²²⁾

エイヘンバウムがこの考えを裏付けるために挙げている根拠は、『タマーニ』の文体分析からなされているものばかりで、『運命論者』についての具体的な指摘は欠如している。そして『タマーニ』と『運命論者』が、真の意味での日記の『公爵令嬢メリー』に加えて組入れられたことで、この「小説のあつまり <собрание повестей>」は長編小説 <роман> に変わったと、結果的事実を言うだけで、そこに至るまでの連鎖化のこみいった途中経過の解明は避けて通っている。しかし、文献学的興味というよりは、この文学作品の本質を理解するためにこそその解明は不可欠である。まして、われわれが先に設定したふた通りの仮説の前者は見過されたままであるうえにこの仮説を出発点にすれば当然予想されるもうひとつの仮定の検証、すなわち『運命論者』が連鎖化をめざす全体的構想の中で書かれたという可能性の追求もなされていないのである。

4

エイヘンバウムの結論の二) に対する反証は、もちろん『運命論者』の

22) Там же, стр. 296.

中に求められるべきである。この短編小説は連鎖の最後の環にあたるが、時間的前後関係からすると決して最後には位置しない。今、ここで、『現代の英雄』の全体にわたって小説の配置の順序と、そこに書かれている時間的な順序の関係を整理してみよう。『現代の英雄』は入子式の構造になっているので、語り手の属する時間系と、語られた諸事件の時間系とは複雑に交わる。だから今は、主題展開の中心的要素であるペチョーリンの行動のみに焦点を絞って、それが叙述される順に諸事件を列記すると、次のようになる。

1. マクシム・マクシームィチの要塞に移って来たペチョーリンがチェルケス娘のペーラを誘拐。彼女の非業の死の後グルジアの別の部隊へ転属、その後はペテルブルグへ戻ったらしいが消息不明。（『ペーラ』）
2. それから5年して、ペルシアへ向う途中のペチョーリンがウラジカフカズ〈Владикавказ〉でマクシム・マクシームィチに再会。（『マクシム・マクシームィチ』）
3. ペルシアから戻る途中でペチョーリンは死亡。（『日記への序文』）
4. おそらく政治的な理由によって追放されてカフカズの任地へおもむくペチョーリンが、途中タマーニに滞在し、密輸一味の女との危険な出来事にまきこまれる。（『タマーニ』）
5. カフカズで派遣軍の行動に加った後、鉱泉療養のためピャチゴールスクへ、ついでキスロヴォーツクへ行く。そこで公爵令嬢メリーをめぐりいざこざからグルシニーツキヤを決闘で殺害。その罰として前線であるマクシム・マクシームィチ指揮下の要塞に移される。（『公爵令嬢メリー』）
6. 要塞に着いてからしばらくして、一時要塞の外に出、二週間コサク村に滞在。ヴーリッチと、彼の命にかかわる賭をし、またみずからも死を賭するような行動に出る。（『運命論者』）

さてこれを時間的な前後の関係に従って組み立てなおすと、4→5→6→1→2→3となる。つまり6と1の間で全体を二分し、前と後を入れ替

えたことによって、連鎖小説『現代の英雄』の内部配置が出来上ったわけである。

なぜそのようなことが作意されたのかは、少し後で考えることにしよう。今指摘しておきたい問題点は、時間的系列からすれば、6の『運命論者』を含めてそこから後の4編の小説には一貫して、連鎖の環のもうひとつのつなぎの役を担っている人物形象マクシム・マクシームィチが登場するという事である。時間系列が崩されたために(だがそれなりに整然としている)、6が一番最後にきているので、このことは案外見過されやすいが、連鎖化の過程を把握する上では重要である。

『運命論者』が連鎖小説の構想の外で書かれたと主張する研究者は、おそらく、この小説にマクシム・マクシームィチが現われるのは一番最後の、ペチョーリンが要塞へ戻ってきてからの場面においてであり、したがってそれは連鎖小説に組入れられる際に、ひとつの動機付け〈мотивировка〉として加筆されたものだと言うであろう。しかし決してそうではない。なぜなら、『運命論者』は『公爵令嬢メリー』でクライマクス〈кульминация〉に達する主題展開の基本的内容を受けて、別の状況設定のもとでそれを再展開している重要な小説である——そのことについても後ほど分析しよう——うえに、その際、マクシム・マクシームィチは、主題〈тема〉そのものを左右する重大な人物設定になっているからである。それを確かめるために当該の箇所を、少し長くなるがすべて抜粋してみよう。

Возвратясь в крепость, я рассказал Максиму Максимычу все, что случилось со мной и чему я был свидетель, и пожелал узнать его мнение насчет предопределения; он сначала не понимал этого слова, но я объяснил его как мог, и тогда он сказал, значительно покачав головою:

—— Да-с! конечно-с! Это штука довольно мудреная!... Впрочем, эти азиатские курки часто осекаются, если дурно смазаны или не довольно крепко прижмешь пальцем; признаюсь, не люблю я также винтовок черкесских; они как-то

нашему брату неприличны: приклад маленький, ——— того и гляди, нос обожжет... Зато уж шашки у них ——— простое мое почтение!

Потом он примолвил, несколько подумав:

—— Да, жаль беднягу... Черт же его дернул ночью с пьяным разговаривать!... Впрочем, видно, уж так у него на роду было написано!...

Больше я от него ничего не мог добиться: он вообще не любит метафизических прений.

要塞に戻ってわたしは、自分に起ったこと、自分が目撃したことすべてをマクシム・マクシームィチに話し、宿命についての彼の意見を知りたいと語ったところ、彼は最初この言葉の意味が分らなかった。そこで、できうるかぎりの説明をしてやると、意味ありげに首を振ってから言った。

「そうですとも！もちろんですとも！それはなかなか不思議なものでありますな！……だがまあ、あのアジア式の引金というやつは、油の塗りが悪かったり、おもいきって指に力をこめて引かなかったりすると、よく不発になることがありますな。正直いってわたしはチェルケス人のライフル銃も気に入らんのです。ああいうものはどうもわれわれにしてみると不作法な代物で、銃尾が小さいもんだから、鼻先が今にもやけどしちまいそうになるんですわ……ま、そのかわりやつらの剣ときたら、あれにはもうこのわたしもただただ敬服しとります」

そのあと少し考えてから付けたして言った。

「どうもお気の毒な方だった……ついうっかり夜中に酔っぱらいに声などかけちゃったりして！……だがまあ、その方はもともとそうなる運命にあったという事なんでしょうな！……」

それ以上彼からは何も聞き出すことはできなかった。彼は形而上学的な議論をまったく好まないのである。（Ⅳ，133）

マクシム・マクシームィチは、カフカーズの辺地で一生を帝政の護持のため忠実に勤めあげた人間に特有の、小さく固まってしまった、そして生活の知恵みみたいなものがたいへん豊富で、その性善なることは確かなのだが、

独善的で偏狭な保守的世界観をもっている。彼は自分の世界観に限界のあること、時代遅れなこと、ようするにペチョーリンには通じないものであることに、少しも気付いていない。おそらく、自分が抑圧者の代表としてカフカーズの諸民族と闘っている——もちろん融和政策の遂行にも努めつつ——という、自己の存在の階級的本質にすら、ただの一度も疑問を感じたことのない人間である。ペチョーリンは反動的で硬直した時代からはみ出た、より正確にははみ出ることを余儀なくされた人間で、時代には絶対服従しないが、しかしつまらぬことにその能力を労費し、無謀自棄とも思われるような出口なさを感じさせる抵抗しかすることができない。だから「運命論」——これは当時流行した思想らしい——をめぐる二人の話は、はじめから噛合うはずがない。ペチョーリンは内なる言葉で語っている。「Я люблю сомневаться во всем: это расположение ума не мешает решительности характера——напротив, что до меня касается, то я всегда смелее иду вперед, когда не знаю, что меня ожидает. Ведь хуже смерти ничего не случится——а смерти не минуешь!>」(Ⅳ, 133)

この言葉はしかし、少し値引きして理解する必要がある。ペチョーリンの勇敢なる前進は、決して徹頭徹尾無謀な行為というわけではない。自分の安全のためにはそれなりに手を打っておき、危険性を最少限にしてから前進するのである。たとえばヴーリッチを斬殺し空屋に閉じこもった酔漢のユサクを生捕りにする時、ペチョーリンは追手の三人のユサク兵に酔漢をドアのところへひきつけさせておき、十分すきをねらってから窓の中へとびこみ、銃煙に助けられてその男を取り押さえた。このような用意周到さは、『公爵令嬢メリー』におけるグルシニーツキィとの決闘の際にもよく描かれている。ペチョーリンは、相手がわずかの傷でも確実に死ぬよ

う、また自分に弾丸が致命傷を与えぬ場合を想定し軽い傷をうけてもけっして崖下へ落ちぬように、なんとか前に倒れようと最大限の努力をしている。

『運命論者』に描かれているこの二人の主要人物の関係は、『ペーラ』でも『マクシム・マクシームィチ』でも一貫している。つまり『現代の英雄』で、マクシム・マクシームィチが描かれているところではすべて（先の図式で言えば6 → 1 → 2 → 3）、この関係の本質は変わっていない。さらに『運命論者』に現われているペチョーリンの性格や行動様式は、この長編小説の中の中心的な作品である『公爵令嬢メリー』においてもっとも全面的に露呈しているそれと全く同じである。ペチョーリンの性格は時間系列に沿って見ると、しだいにその中で悲劇性が深化して行くのは明らかだが、その変化の過程には一貫性がある。そしてこの過程の中ほどに『運命論者』は位置しているのである。これらの事実は、『運命論者』が連鎖化の全体構想の枠内で書かれたのでなければ絶対に考えられないことである。

われわれは『タマーニ』の中に連鎖小説というかたちの長編小説への発展の萌芽があるという仮説に立って考えをすすめようとしているが、『タマーニ』から『運命論者』に移る際——その途中で連鎖小説の中の別のどれかが書かれたかどうかはさておき——何がどのように変化したのかを把握しておく必要がある。『タマーニ』に対してレールモントフが加えた修正は、主人公のペチョーリン化、いいかえれば、作者自身と見られがちな1人称小説の主人公の「3人称化」を計ったということである。この点から合理的に推測すれば、こういった志向から生ずる次の現象は、とうぜん、作者自身をよそおった別の人物形象の登場する、そしてペチョーリンが「私」ではなく「彼」として語られる別の小説が対置されること、さらにその小説と『タマーニ』との芸術的に説得性ある結合がなされることであろう。その場合の、結合を動機付けるいま一人の人物形象こそマクシム・マクシームィチであった、と見るべきである。

さて問題は、レールモントフに、なぜそのような志向が生まれたのかということである。われわれの考えによれば、作者と主人公の間に明確な一

線を描こうとした志向の裏には、芸術的理由のほかに、明らかに政治的な理由があった、とみる見解は妥当性をもっている。主人公やその他の人物形象の客観的描写を通じて“真実”を洗い出そうとする欲求とともに、もう一面では、その真実がまさに真実であるがゆえに発揮する政治性を、その頃のレールモンツフには否応なくカムフラージュする必要があった。帝政にとって好ましからざる「要注意人物」であったレールモンツフが、当時置かれていた政治状況を思いおこせば、それがいかに必要であったかはじゅうぶん納得できる。ペチョーリンのことを、政治的に「無害」で反動勢力も好感をもつ人物のマクシム・マクシムィチの口を通して語らせ、さらにレールモンツフがそれを思い出しながら記述しているという体裁、日記の一部しか発表しないという方法で主人公のあやしげな過去を伏せてしまう巧妙さ、こういったことは、第二版の単行本に敢えて書き加えられた「声明文」とも言うべき「まえがき」に述べられている二人の外交官の会話同様、行間を読む努力を強いるものである。

はたしてペチョーリンはそれほど慎重に描かれなければならぬほど危険な人物なのだろうか。ペチョーリンの急進性を証明した研究としてよく知られているのは、ペチョーリンの友人として描かれている医者ヴェルネル〈Вернер〉が、カフカーズへ流刑になったデカブリストたちやレールモンツフ自身とも親交のあったマイエル〈Н. В. Майер〉という人物をモデルにしていることを明らかにしたBronstein〈Н. И. Бронштейн〉の労作である。²³⁾ またこの他にも、エイヘンバウムは、ペチョーリンがデカブリストの事件と関係のある政治的立場にあったためにカフカーズへ流刑になった人物であることを仄かしているいくつかの箇所をめんみつに調べてあげている。²⁴⁾ その中で彼はたとえば、グルシニーツキィとの決闘の前夜、

23) См.: Н. Бронштейн, Доктор Майер, «Литературное наследство», кн. 45—46, М., 1948, стр. 473—496.

24) См.: Б. М. Эйхенбаум, “Герой нашего времени”, «История русского романа в 2-х томах», т. I, гл. VI, Изд. АН СССР, М.—Л., 1962, стр. 301—304.

眠れぬままにふと読み始め、そのうちすっかり読み耽ってしまった本、つまりスコット〈Вальтер Скотт〉の長編小説『スコットランドの清教徒たち』〈“Шотландские пуритане”〉を分析し、次のように結論づけている。「Накануне дуэли, вызванной «пустыми страстями», Печорин читает политический роман о народном восстании против деспотической власти и «забывается», воображая себя Мортонем. Так Лермонтов подтвердил догадливому читателю (по формуле «Sapienti sat»), что у Печорина действительно было «высокое назначение» и что были ему знакомы другие «страсти»—— те, о которых сказано в «Думе».... 〈“徒ずらな熱情” ゆえにするはめになった決闘を翌日にひかえている夜, ペチョーリンは専制的権力に抗する人民蜂起をあつかった政治小説を読みながら, 自分を小説の中のモートンとして思い描きつつ『我を忘れて』いるのである。このようにしてレー尔蒙トフは, 察しのよい読者に(«Sapienti sat 智者には十分なり» のきまりに則り), ペチョーリンには実際に“崇高な使命”があったこと, そしてまた別の“熱情”, つまり詩『思索』の中で述べられているあの熱情も知っていたということを, 立証している〉²⁵⁾

『タマーニ』の中には, こういった政治性を感じさせる要素は一瞥したかぎりでは見あたらない。しかし, タマーニへ主人公が現われたのは官用でカフカーズの出征部隊へ行くためであるという舞台設定だけで, 「智者には十分」ではなかったか。作者レー尔蒙トフには, この主人公を冒険小説的状况設定——その芸術的価値は, 当時流行のいわゆる冒険小説の比ではないが——の中で描いた後にある不満が残った。この主人公は, このような狭い枠の中では描ききれぬほど豊かなものを潜在的に持っていたのである。それだからこそ, 主人公が行動する多様な諸状況, それらの間の時間的な前後関係(一番始めに書かれた『タマーニ』が, 『現代の英雄』の中の時間的状况設定でも最初なのは偶然ではない), そこに登場させるべき人物形象などが次つぎとレー尔蒙トフの想像力によって生み出されたにちがいない。おそらくそのようにして, 「ペチョーリンの日記への序文」

25) Там же, стр. 303.

以外は、だいたい構想がまとまっていたであろう。単行本として『現代の英雄』が出版される時に、ペチョーリンの日記を「私」が入手した由来とそれを出版する動機については、原稿と実際の最終的なテキストの間に大きな違いが生じているので、この点に関する構想が最後まで煮つまり切っていなかったことは想像できる。²⁶⁾ 原稿のテキストでは、ペチョーリンの日記を発表しても当人からのとがめはないだろうと断ってある（すなわちペチョーリンは生きている）。それが最終的なテキストでは、ペチョーリンの死を幸いに（?!）出版に踏み切ったという設定へと、大幅な変更が加えられているが、いずれにしても、レールモントフ自身と思われる「私」と、マクシム・マクシムィチと、ペチョーリンの日記の三要素によって連鎖の体系を織りなして行くという方向はほぼ固っていたと見るべきであろう。

さてこの連鎖化は、なぜ時間系列に沿った各小説の配置を嫌ったのであろうか。われわれの答は単純である。今述べた**三要素の相互関係をひとま**ず描いておかねば読者には**連鎖の体系の糸口がつかめない**からである。時間的前後関係についてのわれわれの図式（4→5→6→1→2→3）からも分るように、けっしてこの動機が要求する以上に時間的關係の複雑化は行なわれていない。このような理解に立てば、『運命論者』を、この長編小説全体のエピローグだと見るエイヘンバウムの解釈は、²⁷⁾ まちがいではないにしても、少々穿ち過ぎのきらいがある。

レールモントフの構想の中には時間とともに深化するペチョーリンの悲劇性の描写は明確に意図されていたと見られるから、『運命論者』に描かれたペチョーリンは、まだベーラとの決定的な体験を経ていない段階での姿として読まなければならない。したがって次のような読み込み方は主観的で不正確である。

Благодаря своеобразной «двойной» композиции (об этом говорилось раньше) и фрагментной структуре романа героиня в художественном (сюжетном) смысле не погибает: роман

26) Ср.: Там же, стр. 296.

27) Ср.: Там же, стр. 321.

заканчивается перспективой в будущее——выходом героя из трагического состояния бездейственной обреченности («я… смелее иду вперед»; 347). Вместо траурного марша звучат поздравления офицеров с победой над смертью——«и точно, было с чем!», ——признается сам герой(347). Заключительный мирный разговор Печорина с Максимом Максимычем вносит в финал романа еще и ироническую улыбку: «фаталистом» оказывается вдруг не столько Печорин, сколько Максим Максимыч («видно, уж так у него на роду написано»), но без любви к «метафизическим прениям» (347). Тем самым к концу романа они до некоторой степени, хотя с противоположных сторон, сошлись во взглядах на жизнь: ведь Печорин тоже не любит «останавливаться на какой-нибудь отвлеченной мысли» (343).

この長編小説は独特な「二重の」構成(このことは先に述べた)と断章的構造になっているため、芸術的(主題展開上の)意味において主人公は死なないのである。未来への展望が、すなわち無為のうちに破綻への運命をたどるといふ悲劇的状況から主人公が脱する展望が開けて小説が完結しているからだ(「わたしは……いっそう勇敢に前進するのである」; 347 <これは1957年版レールモントフ全集第6巻の当該ページを指す、以下同じ——木村>)。葬送行進曲のかわりに、死に打ち勝ったことを祝する将校たちの声が響いて、「まったくだ、祝されてしかるべきことだった！」と主人公自身も告白している(347)。最後に交されるペチャーリンとマクシム・マクシームィチの穏やかな会話によって、この長編小説はおもわずにやりと笑わせられる終局になっている。というのは「運命論者」は、ペチャーリンよりはむしろマクシム・マクシームィチの方であったことがだしぬけにも判明するからで(「だがまあ、その方はもともとそうなる運命にあったという事なんでしょうな」)、それもしか、*「形而上学的議論愛好」*は抜きにしてのことだからである(347)。そのことによって小説の結末に至り彼らは、相対立する両側からにせよ、ある程度人生観の一致をみせている。ともかくペチャーリンにしても「あれやこれやの抽象的なことをつ

っこんで考えてみるのは」(345) 好きではないのだから。²⁸⁾

ペチョーリンには本当に明るい展望が開けているのか？これは『現代の英雄』の思想的内容〈идейное содержание〉に関わる問題である。答えを出すためには、作品の結末の「色調」の「明るさ」だけでなく、この作品全体に込められている全内容の吟味が必要である。それにまた、この結末の色調ははたして明るいだろうか？「わたしはいっそう勇敢に前進するのである」というペチョーリンの言葉は、必死の抵抗を試みながらも確実に死へ向って破滅させられてゆく末路を暗示しているのであって、けっして未来へ通ずるような建設的な響きを含んではいない。また逆に言えば、それだけ現代への絶望と非難の色調が濃いということでもある。レールモンツフが単行本として『現代の英雄』を発表する間ぎわになって「ペチョーリンの日記への序文」を書き、はっきりとペチョーリンの死を確認したことの中には、連鎖小説の構造上の動機付けの意味をはるかにこえる大きな意味が含まれていると言わねばならない。

さらにまた、主人公とマクシム・マクシームィチはお互いの人生観の中に少しでも共通し理解しあえるものを見出したであろうか？われわれは反対に、この穏やかな会話の中にペチョーリンがマクシム・マクシームィチをけっして受入れず、マクシム・マクシームィチはそれに気付くことなく生きつづけ、最後にはまったくペチョーリンという人間を理解できぬまま別れるという“断絶の関係”の発端を読みとるのである。この二人の関係の中に何かしら少しでも肯定的なものを見出したいという願望の裏には、『現代の英雄』が発表されて以来この百数十年間連綿として続いてきたマクシム・マクシームィチという人物形象の全面的美化の風潮がある。この風潮は不思議なことに、反動的・保守的読者層にも民主的・革命的読者層にも共通している。

5

ニコライ1世がマクシム・マクシームィチにだけは満足したということ

28) Там же.

は、²⁹⁾ レールモントフにとっても喜ばしい事であった。『ペーラ』における語り手としてのマクシム・マクシームィチという形象に担わせた「外交官的」任務は、みごとに効を奏したからである。当時の批評家ブラチョックも、「嫌悪をもようさせるような汚れた」ヒーローたちの中にあっただけひとりマクシム・マクシームィチは例外であると書いているが、同時に彼は作者レールモントフがこの人物に十分敬意を払って描いていないことにニコライ I 世同様立腹している。³⁰⁾ これは、反動的とはいえ、鋭い洞察力である。現代がいかなる時代なのか、その中で良心がいかなる痛みを感じつつ生きながらえているのか、こういった問題にほとんど無知な、無知なだけではなく偏見すら持っている人間（『ペーラ』の中で旅する「詩人」とマクシム・マクシームィチが最近の若者たちについて語り合う場面を思いおこせ）に対して、鋭い現代批判をつきつけようとしている（屈折したかたちになることを余儀なくされてはいるが）レールモントフが、いかに隠そうとも、敬意をいただけていないことは露呈するのである。

しかし現代のソ連の学界で大勢を占めるマクシム・マクシームィチ観は、それとは真向から対立するものである。たとえば、科学アカデミー版の10巻本『ロシア文学史』では、次のようにこの人物が規定されている。
「Типичность Максима Максимыча совсем иного порядка, чем типичность Печорина. Печорин — человек выдающийся, исключительный. Максим Максимыч — обыкновенный, честный офицер, каких было много на Кавказской линии и вообще в армии. Но в образе этого «кавказца» Лермонтов запечатлел лучшие черты простого русского человека, труженика в дни мира и в дни войны, незаметно делающего свое трудное и нужное дело. <マクシム・マクシームィチの典型性はペチョーリンの典型性とはまったく別性質のも

29) См.: Э. Э. Найдич, “Герой нашего времени” в русской критике, в кн.: «М. Ю. Лермонтов ГЕРОЙ НАШЕГО ВРЕМЕНИ», Изд. АН СССР, М., 1962. стр. 166.

30) Там же.

のである。ペチョーリンは卓越した、類い稀なる人間である。マクシム・マクシームィチは、カフカーズの前線に、そして概して軍隊には大勢いたような、普通の誠実な士官である。しかしこの「カフカーズ人」の形象の中にレールモントフは、平和の日にも闘いの日にも勤勉で、困難かつ必要な自分の仕事を人目につくこともないままやっている、純朴なロシア人の最良の諸特徴を刻み込んだ」³¹⁾ マクシム・マクシームィチの「трудное и нужное дело」とは何であったのか？少しでもロシア史を知っている人であれば、ロシア帝国が領土拡張政策の一環としてカフカーズ地方を侵略し、1801年から1829年の間に外カフカーズ〈Закавказье〉も含む大部分を征服して自己の統治下に置いたという事実を、容易に思い出すことができる。しかし中央カフカーズの山岳民〈горцы〉は山中に要塞をつくり盛んなゲリラ活動を継続しており、彼らがほぼ平定されたのは、19世紀も半ばをかなり過ぎてからであった。したがって『現代の英雄』に描かれている時期の、カフカーズ前線駐屯のロシア軍将兵の主たる任務は、他民族の地をロシア帝国領土に組入れ、そこに住む諸民族を配下に治めることであった。こういう任務を「困難で必要な仕事」と見なす事ができる文学者は、当時のロシア帝国の支配者たちのあくなき侵略政策を、歴史的に正当化できる、肯定的な行為と考えている人だけであろう。

マクシム・マクシームィチが純朴で善良なロシア人の典型であることが誤っているというわけではない。この形象の人間的性質に限ったことなら別に問題はないのである。しかしまさにこの「純朴さ」や「善良さ」が、『現代の英雄』の中でどのような芸術的位置付けを与えられているのかを考えると、上に引用したような規定はたちまち的外れなものであることが判明する。

作中人物としてのレールモントフ（つまり『ベーラ』と『マクシム・マクシームィチ』における「私」）は、たしかにマクシム・マクシームィチの人間の善良さを評価し、そのみじめな姿に同情しているかのようである。たとえば、『ベーラ』の終りには次のような「私」のマクシム・マクシームィチ

31) 《История русской литературы》， т. VII, Изд. АН СССР, М.—Л., 1955, стр. 352.

ムィチ観が述べられている。「Сознайтесь, однако ж, что Максим Максимыч человек достойный уважения?... Если вы сознаетесь в этом, то я вполне буду вознагражден за свой, может быть, слишком длинный рассказ. <それにしてもお認めいただきたいのは、マクシム・マクシムィチが尊敬に値する人物だということだが、さていかがなものだろう?……もしお認め下さるなら、あるいは冗長すぎるかもしれない話をしたこのわたしとしても、話しのしかいがじゅうぶんあるというものである>」(Ⅳ, 39)

この二等大尉〈штабс-капитан〉への「私」の同情は『マクシム・マクシムィチ』のおわりでもはっきりと述べられている。「Добрый Максим Максимыч сделался упрямым, сварливым штабс-капитаном! И отчего? Оттого, что Печорин в рассеянности или от другой причины протянул ему руку, когда тот хотел кинуться ему на шею! Грусно видеть, когда юноша теряет лучшие свои надежды и мечты, когда пред ним отдергивается розовый флер, сквозь который он смотрел на дела и чувства человеческие, хотя есть надежда, что он заменит старые заблуждения новыми, не менее проходящими, но зато не менее сладкими... Но чем их заменить в лета Максима Максимыча? Поневоле сердце очерстует и душа закроется... <善人のマクシム・マクシムィチが頑固で口やかましい二等大尉になっていた。なぜか? 自分の方はペチョーリンの首にとびつきたいと思ったところへ、ついうっかりそうしたのか、別の理由があつてのことか、相手は握手してきたからであった。若者がいちばんすばらしい希望や夢を失なうのを見たり、いままではバラ色のヴェールをとおして人間のおこないや感情をのぞいていた若者なのに、そのヴェールが目の前から引き払われてしまうのを見るのは、つらいことである。たとえ若者ならまだ、古い迷いにかわって、同じくなんかと通り抜けて行かねばならない迷いに、そのかわり甘味を味わせてくれることでも劣らない新しい迷いに移って行くという期待がもてるにしてもである……しかしマクシム・マクシムィチの年では、そんな迷いを何と取り換えられよう? いやでも無情になり、打ちとけなくなるしかないのである>」(Ⅳ, 47)

「私」のこれらの言葉が、そのままレールモントフの言葉なのであれば、

マクシム・マクシームィチという人物形象に作者が吹き込んだ芸術的価値は、主人公ペチョーリンの道徳的欠陥に対置させるべき、善良、誠実、素朴、深い人間愛といった肯定的な徳性であったと考えてさしつかえないであろう。たしかにマクシム・マクシームィチは生きた人間を感じさせ、読者を魅了するという点では、野生の魅力をもつベーラや上流社会の中で育った美しいメリーよりも、あるいは不思議なタマーニの女や悲恋に身を滅ぼすヴェーラよりも、はるかに成功している形象である。しかし、「私」とレールモントフを同一視することは、ペチョーリンをレールモントフと同一視するのと同様、大きな誤ちであり、上に引用した言葉を、レールモントフ自身の腹藏ない願望や意見であると考えすることは、あまりにも単純な、「教養の程度のおそまつな」読み方である。

レールモントフがマクシム・マクシームィチという人物形象の中に意図したものは、「私」の言葉の中よりは私の態度の中になじみ出ている。「私」はマクシム・マクシームィチの人柄に感服したから彼との交流を深めたのではなく、彼がしてくれる“話”に対して職業的好奇心をかきたてられたからであった。その目的を達するやり方はかなり執拗である。ペチョーリンから期待に反してすげなくされて、打ちのめされたようにしょげかえっているマクシム・マクシームィチにたいして、ペチョーリンの書き物をいただきたいと申し出るあつかましさには、マクシム・マクシームィチの徳性に対する「私」の評価や、この人物への同情が、言葉だけのものであることを感じさせる暗示がある。

注意深く読めば、レールモントフは「私」という人物形象をとおして、マクシム・マクシームィチ的世界観をそれとなく批判している箇所を発見することも可能である。

—— А всё, чай, французы ввели моду скучать?

—— Нет, англичане.

—— А-га, вот что!... — ответил он, — да ведь они всегда были отъявленные пьяницы!

Я невольно вспомнил об одной московской барыне, которая

утверждала, что Байрон был больше ничего как пьяница. Впрочем, замечание штабс-капитана было извинительнее: чтоб воздерживаться от вина, он, конечно, старался уверять себя, что все в мире несчастья происходят от пьянства.

「きっとまた、フランス人が倦怠なんて流行を持ち込んだんでしょな？」

「いや、イギリス人ですよ」

「はあ、そうなんですか。……それもそうでしょう、やつらときたらいつも札つきの大酒飲みでしたからな。」とかれは答えた。

私はおもわず、モスクワのさる奥方が、バイロンなんて、ただのお酒飲みにすぎませんわ、と主張していたのを思い出した。それでもまだ、二等大尉の意見のほうは、認めてやってもいいようなところがある。というのもかれは、酒をさし控えようと思えば、もちろん、世界の不幸はすべてこれ酒を飲むために起るのだと、自分に言いきかせるような人だからである。(Ⅳ, 34)

エイヘンバウムによれば、この会話の中の「フランス人たち」という言葉からはミュッセを、「イギリス人」からはバイロンを読み取らねばならないそうである。³²⁾ だがそのようには読めない場合ですら、この場面には、「私」ではなくレールモントフの声が聞えている。ペチョーリンの生活態度を見て、このように皮相な俗物的判断しか下しえぬマクシム・マクシームィチを、モスクワのさる奥方と比較し（レールモントフが公爵令嬢と夫人を半ば軽蔑的に描いていることから明らかなように、こういう比較そのものに悪意が感じられる）、それだけでなく、彼の馬鹿正直さを軽く揶揄しているのは、ほかでもないレールモントフ自身と見るべきではないか？ こう考える方がより多くの妥当性を持つと思われる理由は、この会話が交される時点で——それが後で回想されたものにせよ——作中人物の「私」がこれほど深くマクシム・マクシームィチの性格を断言的に見ぬいているのは、どう考えても不自然だからだ。

このお人好のマクシム・マクシームィチは、けっして憎めない人物では

32) Ср.: Е. М. Эйхенбаум, "Герой нашего времени", «История русского романа в 2-х томах», т. I, гл. VI, Изд. АН СССР, М.—Л., 1962, стр. 300.

あるが、しかしベチョーリンからも、チェルケス娘のペーラからも、そしておそらく「私」からも本当に相手にはされなかった。それはこの人物がその柔かい物腰にもかかわらず、固い殻に閉じこもっている人間だからであろう。彼にとって他人は、自分の目に映り、自分の理解の範囲の中に納まる姿だけがその人のすべてであって、そこからはみ出したり、隠れたりしている部分は本質的ではない。彼にあっては山岳民はみな野蛮人で、騙りで、ろくでなしなのである。時代の空気に敏感な青年たちが苦悩するのは、外国から入ってきた流行にかぶれたためである。ゴンチャロフ〈Н. А. Гончаров〉は評論『おおいなる苦痛』〈“Милльон терзаний”〉の中でマクシム・マクシームィチの名の前に一言「鈍感な」〈тупой〉という形容詞を付しているが、³³⁾ この人物に対する絶対的讚美ばかりが聞かれる中であっては、ゴンチャロフの慧眼はさらに光って見えるのである。

そもそも後世の少なからぬ研究家が、マクシム・マクシームィチについての不完全な認識を持つことになったのは、『現代の英雄』の発表後いち早く、この作品の全面的分析を行なったベリンスキィ〈В. Г. Белинский〉の意見の影響によるところが多い。ベリンスキィは主題展開の構造について、今日でも修正を要しないような完璧な分析を行なっているが、マクシム・マクシームィチについての彼の見解には、評論家自身の価値観の押しつけめいたものが感じられる。たとえばベリンスキィはこう書いている。

「Таким образом завязалось у автора знакомство с одним из интереснейших лиц его романа . . . с Максимом Максимычем (курсив автора—Т. К.), с этим типом старого кавказского служаки, закаленного в опасностях, трудах и битвах, которого лицо так же загорело и сурово, как манеры простоваты и грубы, но у которого чудесная душа, золотое сердце. Это тип чисто русский, который художественным достоинством создания напониает оригинальнейшие из характеров в романах Вальтера Скотта и Купера, но который, по своей новосте, самобытности и чисто

33) 原註：Н. А. Гончаров, Собрание сочинений, т. VIII, М., 1955, стр. 14.

русскому духу, не походит ни на один из них. <こうして作者には、彼の長編小説中でもっとも興味深い人物のひとりと知己になる端緒がおとずれた。その人物とは、危険と労働と戦闘の中で鍛えられ、顔といえば、ちょうどその起居振舞が質実剛健なごとく、よく日に焼けて険しいが、卓越した魂とうるわしい心の持主でもある、カフカーズの前参精勤軍人タイプの間人、マクシム・マクシームィチ（原文イタリック—木村）である。これは純ロシア的なタイプの間人であり、創造の芸術的価値からいってワルター・スコットやクーバーの長編小説中の人物のもっとも特色あるものたちを思いおこさせるが、しかし、その新しさ、独自性、そして純粹のロシア的精神という点で、そのどれにも似てはいないのである>」³⁴⁾

ほとんど絶賛に近いマクシム・マクシームィチ観であるが、ベリンスキイのすぐれた点は、それだけに終らずこの人物形象の知的な眼界〈умственный кругозор〉の狭さを、こういった発言の後で忘れずに指摘していることである。だがそれにもかかわらず、ベリンスキイにあっては、マクシム・マクシームィチという人物形象の構造的把握、つまり作品の構成要素として全体構造の中に占める位置の把握がほぼ抜け落ちている。たしかにマクシム・マクシームィチが「語り手」の役割を担っていることの指摘はあるが、それとて、以下に見るようにその詩的価値の評価にいちじるしく傾むいている。「Вот начало поэтической истории «Бэлы». Максим Максимыч рассказал ее по-своему, своим языком; но от этого она не только ничего не потеряла, но бесконечно много выиграла. Добрый Максим Максимыч, сам того не зная, сделался поэтом, так что в каждом его слове, в каждом выражении заключается бесконечный мир поэзии. Не знаем, чему здесь более удивляться: тому ли, что поэт, заставив Максима Максимыча быть только свидетелем рассказываемого им события, так тесно слил его личность с этим событием, как будто бы сам Максим Максимыч был его героем; или тому, что он сумел так поэтически, так глубоко взглянуть на событие глазами

34) В. Г. Белинский, Собрание сочинений в трех томах, т. I, Изд. "Художественная литература", М., 1948, стр. 563.

Максима Максимыча и рассказать это событие языком простым, грубым, но всегда живописным, всегда трогательным и потрясающим даже в самом комизме своем?... <これが『ペーラ』の詩的な物語の始まりである。マクシム・マクシームィチはそれを自己流に、自分の言葉で語り聞かせるのだが、そのために物語が損失を蒙るなどということは少しもないだけでなく、際限なく多くの利点を得たのであった。善良なマクシム・マクシームィチは、自分でも気付かぬままに、詩人になっていた。そのため彼のひと言ひと言、またひと表現ひと表現の中に詩の無限の世界が含まれているのである。次のようなものをものあたりにしても、いったいどちらが多く驚嘆に値すべきものなのか見当もつかない。つまり、詩人（レールモントフのこと——木村）はマクシム・マクシームィチを当人の語る事件のたんなる目撃者にしかしていないわけなのに、まるでマクシム・マクシームィチ自身が事件の主人公であるかのように、この個性と事件とをじつにぴったりととけ合わせたことの方だろうか、それとも、詩人がマクシム・マクシームィチの目をもってこれほどまで詩的に、これほどまで深く事件を見つめることができ、そして素朴で粗野だがいつも生彩のある、いつも感動的な、たとえこっけいなあつかいを受けているところでさえ感銘を与えずにはおかぬようなことばをもって事件を語る事ができたことの方だろうか?>」³⁵⁾

『ペーラ』の中からベリンスキィが取り出して見せてくれたこれらの点は、詩的・芸術的側面だけから評価されるべきではない。なぜならマクシム・マクシームィチの“目”と“口”とは、レールモントフが第2版の「まえがき」の中で言っている、彼の発明した「凶器」のひとつなのである。もし、ペーラの誘拐にまつわる一連の事件の「語り手」または「叙述者」に、長編小説の全体を俯瞰しており、作中人物のすべてを完全にコントロールしている絶対者としてのレールモントフ自身になっていたなら、あるいは、『タマーニ』以下と同様に、ペチョーリンの口からその事件を語らせていたなら、いったいどういう結果がもたらされていたであろうか？おそらく反動的批評家たちや、事あらばレールモントフを陥れようとねらっていた政治的人間たちは、それこそ口をそろえ、最大級の罵詈雑言をもってレールモントフを批難していたであろう。ペチョーリンの言動こそ、まさ

35) Там же, стр. 565.

にこの退廃きわまりない道德観こそが、レールモントフ、およびその類の若者たちの世界観の肯定的反映だときめつけたであろう。しかし作者は、第一に、ペチョーリンはけっしておのれの理想ではなかったし——痛みをはもって共感し、理解していたにせよ——、第二にこの小説をもって描き出すべきものは、むしろこのような人物を生み落し、押し潰してしまう現代社会の病的状況そのものなのだから、いわれのない批難はできるかぎり避ける必要があった。その必要の中からマクシム・マクシームィチという形象は生み出された。

レールモントフは小説の中に「私」として登場し、このマクシム・マクシームィチと親交を深め、これはたいへん好い人間であると言い、読者に同調を求める。この「私」は、ペチョーリンに関する自分の考えはどんなかと問われることを予測して、あらかじめ逃げ道を用意しているのである。これがレールモントフの真の姿ではもちろんない。レールモントフ自身は、この「私」をマクシム・マクシームィチやペチョーリンに遭遇させ、そのかわりあいの中から小説の連鎖のつなぎになるものをたぐり出しているところの、目に見えない人物なのである。

「教養の程度のおそまつな」読者たちは、それでもペチョーリンとレールモントフとを同一視するか、または類似性を発見したといって両者を批難し、そのうえほとんど例外なくマクシム・マクシームィチをほめたたえた。われわれが上に見てきたとおり、このような読み方はまったく正しくないが、一方ではそのおかげで、レールモントフの政治的なまくろみは完全ではないにせよ成功した。かれは、長編小説『現代の英雄』をもって帝政ロシアのあの反動的な時代に、グサリとひと太刀あびせたのであった。マクシム・マクシームィチが形象として魅力にとみ、人から好まれれば好まれるほど、その切れ味は鋭くなった。

さてレールモントフは『現代の英雄』の全編を書き上げて単行本として刊行した翌年、北カフカースのピャチゴールスク〈Пятигорск〉で決闘のためにマルトィノフ少佐〈Н. С. Мартынов〉に殺害され、わずか27年弱の生涯をとじることになるのである。後世の研究家たちが解明したところ

によれば、それは、まえもって計画され、たくみに仕組まれた殺人ともいえるものであったらしい。³⁶⁾ それはペチョーリンのあゆんだ道とほとんど同じの、悲劇的な道だった。しかし、かれの小説はロシア文学史においてその後百花燎乱のごとく現われる、鋭い批判性を含んだ散文心理小説の種をまいたのであった。ペチョーリンの残した「日記」が、その真の作者の死後、そのような花となって咲こうとは、おそらくレールモントフ自身も想像しなかったに違いない。

完

(30 / IV—75 サイゴン陥落の日に)

36) Ср. статью Эммы Гершгени “Дуэль Лермонтова с Барангом”, а также статью и публикации в “Новом о дуэли и смерти Лермонтова”, «Литературное наследство», кн. 45—46, М., 1948, стр. 389—432 и 691—724; см. также соответствующее место в статье о Лермонтове в “Малой советской литературной энциклопедии” (т. 4, стр. 147)